

【巻頭言】

ファッションの礎としての被服衛生学

斉藤 秀子

山梨県立大学人間福祉学部

年度末、部会員の皆様にはいかがお過ごしでしょうか。巻頭言として新年を迎えられた皆様に何を発信できるのでしょうか。自問自答しつつ、被服衛生学とは、について考えてみたく存じます。

実は、2005年、短大生向けの教科書を、本部会の先生方にご協力頂いて作った時には、被服衛生学による衣生活文化の形成を、と書かせて頂きました。被服衛生学は今までの衣生活の歴史を踏まえ、新しい文化を作り上げていく原動力になるべきと考えており、世の中の衣服が快適で、機能的なものになるようにという、願いをこめた言葉でした。

それからほぼ10年を経た現在、被服衛生学の視点から見て、衣生活は変わってきたようです。時代の生活をけん引してきたクロワッサン誌が、楽な服が一番という内容の特集を組むことでもわかるように、快適性、機能性を重視して服を選ぶ人が増えています。そして、今、衣生活文化の形成に代る言葉として、ファッションの礎としての衣服衛生学と、書かせて頂こうと思います。この言葉を思いついたのは、先日、京都国立博物館を訪れた折に、京都にも豊臣秀吉によって造営された大仏殿があり、その礎石の一部が今も博物館の構内に残っているということに感銘をうけたからです。成実弘至氏は、「20世紀ファッションの文化史」で、ファッションは流行、短期間に変化することを前提とした服と書いています。ファッションをこのように定義づけた時に、被服衛生学は、変わり、移ろうファッションの礎として、これを支えていく存在なのではないかと考えます。

この原稿を書くために、1984年部会報第4号から第33号を手元に置いていますが、第4号で、故三平和雄先生は「常に基礎固めを忘れぬように」と書いておられます。先生は、繊維、衣服業界が、被服衛生学に関心を示すようになったが、計測の問題を始めとする研究の充実が必要と説いておられます。そして、現在、繊維、衣服業界は、被服衛生学を始めとする被服学研究の動向を常に注視

している時代となりました。また、部会報と同時に開催された被服衛生学セミナーの要旨集を見ていますと、この間に、ファッションの礎が、深く、そして、太く充実してきています。ファッションは移ろいゆき、消えていくものもあるけれど、礎は未来永劫残って、ファッションを支えていくものと思います。

ファッションについて深井晃子氏は「ファッションの世紀」の中で、「癒してくれる服、コミュニケーション道具を備えたメディア服、サバイバル機能を持つ環境保持服など、そういった新しい機能を備えた服が着られるのもそう先のことではないだろう」と予測し、様々な制約から解放され、機能性をもつ衣服が着られるという現代ファッションの様相を議論しています。そのような現代、ファッションの礎として、被服衛生学研究の充実が社会の要請とも言えます。

この2年間、諸岡晴美部会長は、科学研究費補助金基盤研究(A)による、『シニアの健康・快適な衣生活を支援するための被服衛生学的研究』の研究を進められるとともに、部会員の皆様への研究参加の提案もされています。諸岡部会長のお導きに感謝し、これからも、このような活動が部会員の先生方のご協力により、進捗することが望ましいと考えます。また、昨年、東京での公開講座『衣服と健康の科学 最前線 -健康を支える衣生活-』が開催されました。実行委員長の丸田直美先生、実行委員の皆様のご尽力に、敬意と感謝の意を表します。本部会での交流はこれからの研究の支えとなります。東北の家政学会で、九州のセミナーで集い、交流を深めることができることを楽しみにしつつ、稿を閉じることといたします。

<連絡先>

〒400-0035 甲府市飯田5-11-1

山梨県立大学人間福祉学部 斉藤秀子

電話：055-224-5261 FAX：055-228-6819

eメール：saito@yamanashi-ken.ac.jp